№36　2005年12月

立山おはなしの会主催学習会

図書館はこんなに変わる

9月22日（木）夜7時30分より、立山町五百石公民館

学校図書館についての学習会が、立山町で行われました。立山町は富山市に隣接し、今回の合併では単独で行政運営が続けられることが決められた町です。10の小中学校がありますが、現在は学校司書は1名も配置されていません。にもかかわらず、立山町に居住する司書資格を持った3名の方が富山市の学校司書として勤められています。いわゆる、人材の流失ですね。そんな立山町で昔話を各学校に届けているおはなしの会の主催で、学習会が開かれました。

まず、岡山市学校図書館ビデオ制作委員会作成の「本があって、人がいて、part2まなび∞学校図書館」のビデオを視聴し、新富山市（旧八尾町）で1日4時間1校専任で働いておられる学校司書の細川菜摘さんが旧八尾町の学校で働く状況や人が入った後の図書館の変化などを語ってくださいました。毎日することには限りはなく、環境を整えて子どもたちの個々の思いに応えるだけでも4時間ではまかないきれず、先生方の授業作りへの支援などは、ボランティアでの時間を提供するしかないが、それでも思うようにならないというお話でした。

学校図書館は法律に定められたとおり、教育の課程に寄与することを求められる場所です。そこで働く人が正規であろうと非常勤パートであろうと、能力がある人が入れば、勤務時間にかかわらず、その働きを求められてしまうのが学校図書館なのだと思います。つまり、いいかげんな制度で職員を入れるということは、最初から本来の機能を求めることができないマガイモノの図書館でも構わないということです。それでは子どもたちの学ぶ権利が守れないと感じて、すこしでも本物の図書館に近づけるためにボランティア時間を差し出して働いているのが、多くの非常勤の方々なのです。

細川さんの実践報告の後、富山図書館を考える会の事務局である江藤が、今後の立山町の市民の動きに多少の参考になればと思い、考える会設立の思い、経緯などを話させていただき、他自治体の状況なども合わせて話しました。学校司書のまだ配置されていない地区では、どこでもそうなのですが、この厳しい財政状況下で、良いものとは思うけれど、新たな財源を捻出してまで人を採用する意味があるのだろうかという点が迷われる部分のようです。そんなときには、学校司書がいるよさを具体的に理解していただく活動が有効で、その積み重ねにより、さまざまな事業の中でも学校図書館が上位に位置づけされていくことになるのだと思います。

立山町の活動は今始まったばかりですが、立山おはなしの会の実績により、参加してくださった方々は各学校のPTA役員さんや教員の方々、議員さんなどで、この学習会が明日につながる動きになると期待がもてる討議がありました。新しい学校司書が、誕生する自治体がまた増えることを願わずにはいられません。